鴻巣西中通信

学校だより No.6

鴻巣市立鴻巣西中学校
鴻巣市大間1161番地
令和6年９月30日

学校教育目標「心豊かで たくましい 西中生」
公式ホームページ https://konishi-j-konosu.edumap.jp/

ビヤホールで、もしビールの中にハエが入っていたとしたら

国民性を表すエスニックジョークと言われるものがあります。表題についてあなたなら？

・アメリカ人なら支配人を呼び、「衛生管理がなっていない」と怒鳴り、訴訟を起こす。
・イギリス人なら知らぬ顔で、もう１杯分注文してそちらを飲みちゃんと2杯分払って黙って去る。
・フランス人なら大げさに騒ぎ立てる。支配人を呼びつけ、まわりの客の注意をうばって散々悪態をついて、もう二度と来るまいと捨てぜりふを残して出てしまう。もちろん金は払わない。
・ドイツ人ならハエをつまんで捨てるが、ちょっと考えてから、アルコールには消毒作用があるからと合点し、そのビールをそのまま飲んでしまう。
・日本人なら一瞬怪訝な顔をするものの態度には出さず、静かにボーイを呼んで新しいジョッキとハエの入ったジョッキを取り替えてもらう。

（注…諸説あります。差別的な意味で紹介したのではございませんのでご理解お願いいたします。）

私が中学生の時の国語の教科書に、日本人の医師がドイツに留学していた時、大学生たちがリンゴを丸かじりしている途中で時々何かをペッと吐き出しているのを見た話が載っていました。吐き出していたものは、なんと「虫」だったのです。驚いた医師は「どうして虫の入っているリンゴを食べるのか」と聞きます。大学生たちは、「虫がいるのは農薬を使っていない自然栽培の新鮮な証拠だ」と平然と答えた…という内容でした。数十年前に日本で開催された国際女子マラソンで、優勝したドイツ人選手が、つば（唾液）を道に吐かないようにハンカチを握りしめ、時々そのハンカチで口を拭う姿が称賛されたことがあります。優勝インタビューでそのことについて問われると、彼女の答えは、たった一言、「私はドイツ人だから。」

2024年フランスパリオリンピック・パラリンピックで、保護者の皆様、地域の皆様はどんなこと、どんな場面が印象に残っているでしょうか？　日本人選手についてはいかがでしょうか？　私が注目したのは日本人選手の喜びや悔しさの表現の仕方です。その中でも、柔道の阿部一二三選手が優勝を決めて、畳を降りる前に正座して深々と「礼」をしたのが一番印象に残っています。外国人選手の多くは、優勝が決まるとその場でガッツポーズしたり飛び上がったりと体全体で喜びを爆発させます。一方、日本人選手は、優勝してもガッツポーズはせず、負けた相手を気遣います。「誤審」とおぼしき判定にも素直に従い抗議などせず、相手選手の健闘を称えます。また、期待されたものの、金メダル及び入賞を逃した選手がしきりに「お詫び」していたのも印象的でした。オリンピックという世界最高の舞台で大会当日のその日、その瞬間にパフォーマンスを最大限発揮するのがいかに難しいかは、金メダル候補と言われていた選手のまさかの予選敗退という結果が如実に物語っています。

さて先ほどの柔道の話ですが、ある新聞記事では「柔道」が「JUDO」になってしまったと書いてありました。それは、日本発祥の柔道がスポーツの一種として世界に普及したが「礼儀」「礼節」までは伴わなかったという内容でした。「礼に始まり礼に終わる」、勝っても負けても、お互いに健闘を称え合い相手に敬意を表するのが柔道の精神です。世界のホームラン王の王貞治氏がまだ若かりし頃、ホームランを打ってガッツポーズをしてホームインしたことがありました。ところが試合後父親からこっぴどく怒られたそうです。「打たれたチームや投手の気持ちを考えて行動しなさい。」…その後、ガッツポーズはしなくなったそうです。勝ってうれしい、負けて悔しいのは当たり前です。自分が成長できるのは相手がいるからこそです。これは、ラグビー試合後の、「ノーサイド」にも通じます。私たちも相手への敬意を忘れずに教育に携わります。　（校長　橋本　浩）